



傘施餓鬼



川崎ゆきお

雨が降っていた。小雨だ。

狭い路地の奥に占い師の婆さんの家がある。

「何か悪い霊でも憑いているようなので、お祓いをして頂きたいのですが」

貧相な初老の男が頼む。悪霊ではなく貧乏神が憑いていそうだ。

「はいはい」

占い婆さんは軽く引き受ける。

「ところで、ここは占い所、お祓いの祈祷師はおらんがなあ」

「整骨院か、整形外科か、按摩や針程度の違いです」

「少しずつ違うと思うがなあ」

「すみません。ここが近かったので、まあ、似たようなものだと思ひまして」

「そうかいそうかい。それで、どんな具合じゃな」

「私は個人事業主なのですが、最近何となく身体がだるくて元気がありません。それにやることなすこと全部しくじることが多く、気持ちがどんどん沈んで行きます。これは霊障ではないかと、自己判断したわけです」

「霊障？ 何でもかんでも、霊の前後に漢字をくっ付けて造語してはいかん」

「言うでしょ。霊障って」

「まあ、それはよいが、わしは占い師でな。まあ、何でもやるが、要は悪い霊を抜けばよいのじゃな」

「はい、除霊です」

占いの婆さんは男の顔をじっくりと見る。決して人相でその人が分かるわけではないが、ある程度の類型、パターンがある。ただ、この婆さん、靈感はないので、具体的に見えるものでしか判断しない。それで十分なのだろう。

「では、簡単な方法を教えてやろう。実行するかい」

「はい、お願いします。出来ることと出来ないことがあるので、何とも言えませんが、出来ればここで祓ってもらって、すっきりして帰りたいのですが」

「そんなことが出来るのなら、わしゃ大金持ちよ」

「では、どのような方法で」

「ここではやらん」

「では、深山で滝に打たれてとか」

「スーパーでよい。コンビニでもいいが。まあ、店屋でよい」

「はあ？」

「何処か思い当たる所は？」

「いつも毎日通ってるスーパーがあります」

「スーパーならよろしい。一番よいかもしれんのかう」

「はい」

「足は」

「足はあります。歩けます」

「スーパーまで歩いて行くのかな」

「いえ、自転車です」

「おお、それはいい。それで決まりじゃな」

「スーパーとお祓いとはどう関係があるのでしょうか」

「まあ、聞きなされ」

「はい」

「この梅雨空、雨は必ず降る。晴れておってもな」

「気象と関係するお祓いですか」

「先を急ぐでない」

「あ、はい」

「雨が降りそうで降らん時刻にスーパーへ自転車で行きなされ」

「はあ」

「傘を持ってな」

「当然ですね」

「その傘、自転車置き場に残して行きなされ。自転車のハンドルに引っ掛けるもよし、サドル下に引っ掛けるのもよし。何でもいい。要は傘を店内に持ち込まんことじゃ」

「それで」

「それだけじゃ」

「はあ」

「雨のタイミングを見計らって、実行しなされ。まあ、雨に関係なく、常にスーパーでは傘を自転車に残す。これを続けなされ。何日かかかりましょう」

「それはどういうことでしょうか」

「何も聞かず、考えず、そして思わず。そして、後日、結果を報告しなされ」

「はい」

その後日だが、男は傘を盗られた。

そして、それを報告に来た。

「よし、祓えたようじゃな」

「はあ」

「傘が消えた」

「はい。少し高い傘でした」

「悪霊は傘とともに流れた」

「はあ？」

「傘施餓鬼、傘流しと申してな、悪いものを誰かが持ち去ったのじゃ。これで、取れたぞな」

「祓えたのですか」

「傘盗人の畜生に施したことになる。その餓鬼が何処かへ運んだ。もう悪しきものは消えた」

「餓鬼って」

「盗んだ奴よ」

「はあ」

「どうじゃ。具合は」

「ああ、そういえば」

「んっ」

「何か、今、急に軽くなったような」

「うんうんうんうん、それぞれ」

「はい、気も明るく」

「うん、うん」

「抜けたようですわ」

「また具合が悪うなったら、傘を餓鬼にやりなされ」

「はい、有り難うございました」

世の中には気のせいも大事だ。

了